

「多様なことば」へのまなざしを問う

第6回の「日本の多言語状況」で確認したように、言語というものを「ひとつ」「ふたつ」と数えられる単位としてとらえることは困難である。どのような基準をもって「ひとつの言語」と規定するのかという問題が生じるからである。

家庭ごとに食文化がちがうように、「その地域の言語」「その集団の言語」にも多様性がある。おぼろげに、地域的、集団的な共通点があることを見いだすことはできる。視点をかえれば、ちがい（個人差）を見いだすこともできる。

「言語」は、どれほど共通していて、どれほどちがいがあるか。「ひとつの言語」を定義しようとしても、どこで線を引くのかという問いにつきあたる。

「〇〇語」という呼称（名づけ）は、ある視点からカテゴリー化した「分類」であって、現実の実態ではない。共通点を見いだすことによって、きりわけられたものである。ことばは多様であるのだ。問題は、その多様なことばに人々がどのような態度、まなざしをむけているのかということだ。

今回は、多様なことばや話者に対する態度について検討してみたい。

「正しいことば」？

まず、規範について考えてみよう。規範とは、「〇〇は、こうあるべきだ」というものである。だれしも、自分のなかに基準がある。「〇〇は、こういうものだ」という意識をもっている。だからこそ、自分の常識から「逸脱」していると感じた場合は、「これは、まちがっている」と認識するのである。しかし、そうした態度が言語にむけられたとき、どうなるだろうか。

ここで、ジェームズ・ミルロイとレズリー・ミルロイによる『ことばの権力—規範主義と標準語についての研究』をみてもみよう。ミルロイらは「「これが正しいことばづかい」だ」という類の規範的態度は、言語に対する狭隘（きょうあい）かつ不寛容に結びつきやすい」と指摘している（ミルロイ／ミルロイ1988:85）

一般の人々（すなわち標準語イデオロギーを疑問なく受け入れている人々）にとって、「文法」とは外部の権威者たちがことばの用法の上に強制的に押しつけてきた一連の「規則」のことである。この規則の大半は現に用いられている特定の用法（different to など）に対する数々の禁止令である。言語学でいう「文法」とはこれよりもはるかに広い概念である。それは外部から押しつけられた規則ではなく、もともと言語に内在する複雑にからみあった抽象的体系のことである。ネイティブ・スピーカーとはこうした文法知識を本能的に身につけている人々のことであって、この生得の知識のおかげで彼らはその言語を理解し使用することができるのである（114-115ページ）。

言語学的に言語を観察して記述された文法を記述文法という。これは、ことばの使用実態を観察して、その規則性を見いだすものである。それに対して、文学者や評論家などの言語の権威者が「つくりだし、強制する」文法のことを規範文法という。

書きことばと規範

ミルロイらが強調しているのは、言語に規範がもとめられるとき、「「正しい」ことばづかいのモデルとされる」のは「書きことば」であるという点である（50ページ）。そして、「「書きことば」と「話しことば」は互いに形態も機能も異なる別次元の存在だとはいえ、前者が後者の「正しさ」のモデルと見なされることが実際にはしばしば起こっている」のが現実である（同上:106）。

ミルロイらは、「書きことば」偏重がもたらす問題について、つぎのようにのべている。

「書きことば」偏重の結果は、「話しことば」の文法構造と社会的機能に対する軽視へとつながり（「話しことば」を対象とした満足な文法書がこれまで一度も書かれたことがなかったために）、「話しことば」を「書きことば」の基準で判断するという、誤った傾向が生まれてきた（90ページ）。

言語を規範的にとらえ、あるべき姿を規定し、そうではないあり方を否定することは、規範主義であると同時に、自文化中心主義であるといえる。なぜなら、その「あるべき姿」というものは、自分の視点や多数派の視点にすぎないからである。

ことばの規範主義を強化するものとして、書きことばと言語テストをあげることができる。つまり、問題と回答を規定し、ひとつの正解をさだめる。これまでの言語教育は、そのようにして「正しいことば」を規定してきたのである。

ここで一例をあげよう。規範主義者は日本語の「ら抜き言葉」を「ことばの乱れ」だと主張する。しかし、「たべれる」「たべれない」をおかしいというのは、一面的な見方である。そこには、ふたつの問題がある。ひとつは、書きことばの規範を話しことばに適用している点であり、もうひとつは、ことばの地域差を無視している点である。自分のことばの感覚を絶対視し、そのほかの表現や用法、発音などを「まちがっている」というのは、自文化中心主義であり、非言語学的な態度である。ことばのバリエーションについて無知なだけである。

ことばのバリエーションと言語学習

ダグラス・ラミスは「イデオロギーとしての英会話」というエッセイで、つぎのようにのべている。

発音は相対的なものである。イギリスとアメリカの両方に多くの方言があり、変化があり、おのおのの国内でどれが「スタンダード」であるかは、力関係によって決められる問題である。「スタンダード」とは、つまり支配階級の言語である。同様に、フィリピンで発達したいろいろの英語が「正しくない」ということは不可能である。…中略…どちらの発音をあなたが勉強したいかを決めるのは、言語学的事項ではなく、政治的なことである。それはあなたが誰に話したいかという問題である（ラミス1976:24）。

英語は多様であり、地域差がある。そのため複数形で表現されることがある（Englishes）。にもかかわらず、日本で学習する場合、英語というものは「アメリカ英語」であることがほとんどである。もちろん、カナダやオーストラリアの英語であったり、イギリスの英語である場合もある。しかし、インドの英語ではないし、フィリピンの英語ではない。アフリカの英語でもない。アメリカの黒人英語でもない。なぜか。それは、英語のなかでもアメリカ英語が「つよい」という社会的背景があるからだけでなく、やはり「あなたが誰に話したいか」という選択の問題であるといえる。

英語を学習するにせよ、ほかの言語を学習するにせよ、あなたは、どの地域の言語（どのバリエーション）を学習したいのか。そして、それはなぜか。

価値づけられる言語、おとしめられる言語

英語が世界のなかで特権的な位置をえていること、国際語であるかのようにとらえられていることを問題視する議論がある。その議論では、英語を国際標準のようにとらえるのは言語帝国主義であるといえる。言語教育は英語に偏重すべきでないし、さまざまな場面で英語を使用しすぎている、それは問題だという議論である。

言語帝国主義として問題とされるのは、英語だけではない。場面や関係によっては、ほかの言語も言語帝国主義的に作用していることが指摘される。たとえば、ある地域が植民地支配された場合には、宗主国の言語が言語帝国主義として機能する。現在では、植民地をもたなくとも、経済力のある国の主流言語が言語帝国主義的な地位をえることがある。

「言語帝国主義論の射程」という論考で糟谷啓介（かすや・けいすけ）はつぎのように指摘している。

…言語帝国主義は「もしたったひとつ言語だけが身につけられるとしたら、あなたはどの言語を選ぶか」という脅迫的な問いを話し手に投げかけつづける…中略…。もちろん、「メジャーな言語」「威信のある言語」という答えが返ってくるのはお見通しである。

近代社会における「言語の乗り換え」がけっして無垢な場の「自然な」できごとでないのは、言語を稀少な財とみなす希少性原理が「言語の乗り換え」を加速化させるからである。希少性は個人に「欠如」の意識とそれを

満たそうとする欲望を同時に生じさせる。「特定の言語—たとえば英語—が話せない」ことを、何らかの言語的欠如と感じるからこそ、ひとはみな「自発的に」支配言語を学ぼうとするのである（かすや2000:385）。

わたしは、どのような言語をまなぶのか。そして、それはなぜか。

わりきって「仕事に必要なだから」といえるなら、「言語の乗り換え」の危険性はないといえるだろう。しかし、移民二世の場合、周囲は自分たちの言語（親の言語）をほとんどだれも使用していない。親は「ことばができない」から困っている。そのような状況をみて、親の言語には価値を見いだすことができず、主流言語だけを使用するようになる場合がある。親は自分たちの言語をはなしている。しかしそれは「価値のない言語」であり、「ことばができない」のと同じだと、おもってしまうわけである。

言語権や継承語という理念は、どの言語も大切なものだと主張する。

パターナリズムと言語態度

言語態度とは、言語にどのような態度をしめすかということだけでなく、ある言語の話者に、どのような態度をしめすかにも注目する。たとえば、その場で「弱者」として認知される話者に対する態度として、パターナリズムをあげることができる。

介助や介護をうけている人、あるいは「通訳をうけているとみなされている人」は、周囲の人から無力化されてしまうことがある。なにも判断できず、責任をとることができない存在のようにあつかわれてしまうということだ。

たとえば、あなたの目の前に、車いすの人と、その介助者がいるとする。あなたは、どのようにコミュニケーションするだろうか。一般的な傾向について、岡原正幸（おかはら・まさゆき）はつぎのように説明している。

車椅子に乗った障害者とそれを押す介助者を視野に捉えた世間の人々は、ほとんど自動的に、一方を「運ばれる客体」、他方を「運ぶ責任主体」と定義する。そして、彼らと関わらなければならないときには、人々はもっぱら介助者の方を行為の相手に選ぶ。たとえば、障害者が自分の財布からお金を出して商品を買った場合でも、店員は介助者の方に釣銭を渡そうとすることが多い。「お店の人が、介助者にばかり説明するんですね。こっちに説明すればいいのに、こっちに説明しないで向こうでちょこちょこことね。介助者のほうもそれを聞いてるんですよ。」車椅子での階段の昇降を頼まれた通行人も、「どうすればいいのかわかるのか」とか「どこを持っていいのかわかるのか」などの質問は、車椅子に座っている方に向けてなされることはなく、まずまちがいなく、それを押している方に向けられる（おかはら2012:212）。

このような現象を、テーヤ・オストハイダは「第三者返答」と表現している（オストハイダ2005、2011）。

自立生活をささえるという趣旨で介助をしている人にとって、このような態度に同調することはできない。そこで、障害者と接したことがほとんどないような人が障害者と直接コミュニケーションをとるように、工夫をする。

たとえば、コンビニのレジで「お弁当、あたためますか？」ときかれたとする。そのとき介助者はどうするか。

わたしは、つぎのような対応をとる。自分はこたえない。障害者がこたえるのをまつ。あるいは、障害者のほうをみる。そのことで、「判断する主体はだれか」ということを店員に明示する。そのあとは、店員は障害者に直接はなしかけられるようになる。しかし、そのようにしようとして心がけていても、じっさいには、本人が返事をするまえに、介助者がこたえてしまうこともある。

通訳を介して会話をしているときでも、「通訳をうけているとみなされている人」のほうをみずに、通訳者の顔をみて会話をすることがある。だからこそ、そのような状況をさけるために、通訳者は一歩さがって通訳をすることがある。それは、「あなたたちが会話をしているのですよ」ということを明示するためである。

まとめ

ことばはコミュニケーションに使用されるが、ことばに対する規範的な態度がコミュニケーションの邪魔をすることもある。相手に対する先入観のせいで、コミュニケーションをさけてしまうこともある。ことばは人と人をつなぐが、同時に、ことばが通じない人をおざける。ことばがナショナリズムの問題にからめとられやすいのは、ことばには結束と排除というふたつの側面があるからである。つまり、人をまとめる力と、人をとおざける力があるということである。その点をふまえて、ことばをどのように使用するのか。どのようなことばを学ぶのか。

参考文献

- あべ やすし 2010 「てがき文字へのまなざし—文字とからだの多様性をめぐって」 かどや ひでのり／あべ やすし編『識字の社会言語学』生活書院、114-158
- あべ やすし 2012 「漢字圏の手話の呼称と「規範化」の問題」 『ことばの世界』（愛知県立大学高等言語教育研究所）4号、9-21
- 大木 充（おおき・みつる）／西山 教行（にしやま・のりゆき）編 2011 『マルチ言語宣言—なぜ英語以外の外国語を学ぶのか』京都大学学術出版会
- 大平 未央子（おおひら・みおこ） 2001 「ネイティブスピーカー再考」 野呂 香代子（のろ・かよこ）／山下 仁（やました・ひとし）編『「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み』三元社、85-110
- 岡原 正幸（おかはら・まさゆき） 2012 「コンフリクトへの自由—介助関係の模索」 安積 ほか『生の技法』生活書院、191-231
- オストハイダ、テーヤ 2005 「聞いたのはこちらなのに… 外国人と身体障害者に対する「第三者返答」をめぐって」 『社会言語科学』7(2)、39-49 (<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009570070>)
- オストハイダ、テーヤ 2011 「言語意識とアコモデーション—「外国人」「車いす使用者」の視座から見た「過剰適応」」 山下 仁（やました・ひとし）ほか編『言語意識と社会』三元社、9-36
- 糟谷 啓介（かすや・けいすけ） 2000 「言語帝国主義論の射程」 三浦 信孝（みうら・のぶたか）／糟谷 啓介編『言語帝国主義とは何か』藤原書店、375-386
- 金水 敏（きんすい・さとし） 2003 『ヴァーチャル日本語—役割語の謎』岩波書店
- 佐藤 慎二（さとう・しんじ）／ドーア 根理子（どーあ・ねりこ）編 2008 『文化、ことば、教育—日本語／日本の教育の「標準」を越えて』明石書店
- 佐野 直子（さの・なおこ） 2015 『社会言語学のまなざし』三元社
- 田中 克彦（たなか・かつひこ） 1981 『ことばと国家』岩波新書
- 田中 克彦 1993 「外国語を学ぶことの意味」 『国家語をこえて』ちくま学芸文庫
- 寺沢 拓敬（てらさわ・たくのり） 2014 『「なんで英語やるの？」の戦後史—《国民教育》としての英語、その伝統の成立過程』研究社
- なかの まき 2013 「だれのための「ビジネス日本語」か—言語教育教材としての「ビジネス日本語マナー教材」にみられる同化主義」 『社会言語学』13号、17-41
- 中村 桃子（なかむら・ももこ） 2007 『「女ことば」はつくられる』ひつじ書房
- 中村 桃子 2012 『女ことばと日本語』岩波新書
- ましこ・ひでのり 2014a 『ことばの政治社会学』三元社
- ましこ・ひでのり 2014b 「「言語」と「方言」—本質主義と調査倫理をめぐする方法論的整理」 下地理 則（しもじ・みちのり）／パトリック・ハインリッヒ編『琉球諸語の保持を目指して』ココ出版、22-75
- マッカーサー、トム 牧野 武彦 監訳 2009 『英語系諸言語』三省堂
- ミルロイ、ジェームズ／レズリー・ミルロイ 青木 克憲訳 1988 『ことばの権力—規範主義と標準語についての研究』南雲堂
- 安田 敏朗（やすだ・としあき） 1999 『〈国語〉と〈方言〉のあいだ—言語構築の政治学』人文書院
- 安田 敏朗 2006 『辞書の政治学—ことばの規範とはなにか』平凡社
- ラムス、ダグラス 1976 『イデオロギーとしての英会話』晶文社

関連キーワード

母語の干渉：自分の言語（母語＝第一言語）とはことなる言語（異言語、第二言語）を学習し使用するとき、自分の母語の影響がでてしまうことをいう。母語の干渉は、文法、語彙（ごい）、発音、聞きとりのすべてにでる。それは、母語話者の視点からすれば不自然であるとか、まちがっているというふうに感じられる。日本語話者にとっては「ベンチ」と「ベンチ」の発音はちがうものである。しかし、日本語非母語話者のなかには、そのちがいが不明瞭に感じられる人もいる。逆に、日本語話者にとっては「n」と「ng」の発音の区別はむずかしいものである。他者の発音や文法をバカにするべきではないし、自分で卑下することもない。母語の干渉は、言語現象として、あたりまえのことである。ある言語の学習者がその言語のバリエーションを無視して母語話者のあいだに優劣をつけようとすることもある。それもまた、非言語学的な態度である。自分が学んでいるバリエーションだけが「正しい」ものと誤解しているにすぎない。

フォリナー・トーク：母語話者と非母語話者が会話するとき、母語話者があゆみよって、わかりやすくはなすことをフォリナー・トークという。そもそも、母語話者があゆみよっているのは、その人にとっての異言語をはなしている非母語話者であることを考えれば、母語話者のほうは、できるかぎり、ききとりやすく、わかりやすい話しかたを意識的にすることがもとめられるといえる。

ことばの意味とは：言語学の視点からいえば、ことばの意味とは、その言語の話者のあいだで共有されているものをさす。辞書に書かれていることが「ことばの意味」ではない。あるコミュニティにおいて、どのようにその語が使用されているのかを観察し、見いだすことができるのが、その語の意味である。つまり、ことなるコミュニティではちがった意味で使用されていることもある。そのどちらかだけを「正しい」というのは言語学的な態度ではない。自分の社会的な地位や立場を利用して他者の言語使用をおとしめる人がいる。それはたんに、思いあがっているだけのことである。どのような語も、具体的な文脈のなかで発せられるものである。そのため、厳密に言えば、その語の意味は文脈ごとにことなる。そして、話し手にとっての意味と聞き手にとっての意味がズレてしまうことも、よくあることである。

文字表記の歴史：音声言語のうちのある言語を使用し、その言語の文字表記を日常的によみかきしている人は、いまある表記になれてしまっており、その表記法（正書法）が、「たまたま、今はそのようである」ということが理解できていないことがある。「わたしは、がっこうへいきました。」という墨字（すみじ）の「かなづかい」は、絶対的なものではなく、いまのルールでは、そのように書くというだけのことである。墨字の日本語表記は一般的にわかちがきをしないが、それも、たまたまのことである。日本語、タイ語、漢語（いわゆる中国語）以外のほとんどの言語は、わかちがきを導入しているが、最初からわかちがきされていたわけではない。英語にしても、わかちがきは、歴史のなかで導入されたものである。句読点や記号と同様に、みやすさ、よみやすさのために、とりいれたものである。発音はゆるやかに変化するものであるが、文字表記は大胆に改善（変更）されることがある。

コメントの紹介

ヘイトスピーチといえば、最近のニュースで川崎市が条例を検討しているという記事が印象的である。川崎市では、ヘイトスピーチに刑事罰を課すという、全国初の取組みで注目を集めているといえる。川崎市では被害にあった在日韓国人から歓迎の声が上がった。罰の内容は、一万円の「罰金」を想定しているという。僕がこのニュースを見て思ったのは、日本でヘイトスピーチなるものが条例として検討されるほど深刻な問題になっていた、ということだ。…後略…

【あべのコメント：1回めに「勧告」し、2回めには「命令」し、3回めの違反時には氏名を公表する、なおかつ検察に起訴し、50万円以下の罰金を裁判所が貸すといったながれのです（『日本経済新聞』「川崎市の差別禁止条例、ヘイトスピーチに罰金刑」2019年6月24日）<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ046496940U9A620C1L82000/>。】

自分も在日であることから在日へのヘイトスピーチ問題には関心があります。鶴橋・新大久保など、在日朝鮮人が多く居住する地域では、在日朝鮮人に対するヘイトスピーチが多く行われており、そこに住む在日の人々は本当に恐怖を感じています。「帰れ」「日本から出ていけ」はもちろん「殺せ」「死ぬ」、2013年には中学生の女の子が発した「鶴橋大虐殺をするぞ!」と宣言したこともあります。全く知らない人達が大勢になった、生まれた場所も育った場所も、なんなら使う言語も変わらない自分に向かって殺意や憎悪を向けてくるのです。在日特権などとありもしないウソを大声で言いながら、周りの人々に、次の世代にその憎悪を植えます。在日の人々はいつまで苦しめられるのでしょうか？ こういった話を他の人にすれば、「ひどいね!」とももちろん言いますが、「でも見たことない」「なんでそんな思いをしてまで日本にいるんだろうね」と言われたことがあります。興味がなければ、自分に関係ないと思えば、知らないことは当然かもしれませんし、知らなければ理解を得ることもできないかもしれません。どうすれば、この問題を「在日の人の問題」でなく、「日本社会の問題」であり、「もっと知って変えなければならない」と思ってもらえるのでしょうか。話は少し変わりますが、東京朝鮮中高級学校の文化祭で、美術部の「展示作品」として、ヘイトスピーチがいっぱいに貼りつけられた壁がありました。1つ1つ読んでいたら本当に涙が出ます。部のツイッターにもヘイトコメントが大量に集まっていました。私は、何がそんなに憎いのか、どうしてそれをぶつけられずにいられないのかが、本当に不思議です。

…最近Twitterで、電車内で大声を出す高齢の方に対して「老害」という言葉を使って批判しているツイートがあった。顔も一切隠さず、すごい数リツイートされていて、多くの方がそのツイートに対してひどい言葉をリプライしていた。老害という言葉を使うことに対して意味がわからなかったし、怒りがこみあげてきたし、マナーを守るという観点から

したらその方に非がないとは言えないけれど、その人の人生を左右するツイートと分かっているやっただとは思えずモヤモヤしている。ネット社会は怖すぎる。…後略…

人は皆自分が汚いものに触れることを嫌うと思います。私の家の近所に鶏肉を作る精肉工場があります。そこには生きたニワトリが何羽も他の場所からトラックに載せられてきます。ずっと今の場所に住んでいる母によれば、そのトラックは以前は昼間にも来ていたようですが、現在は真夜中にしか来ません。誰かが苦情を入れたんだと思います。私も夜中に出かけた時一度だけそのトラックを見たことがあります、やはり自分が食べる肉の生きた姿を見るのは現実を突きつけられたようで苦しくなりました。そのような職に就く人を差別したり、苦情を言って負担を増やすのはいけないことかもしれないけど、現実から目を背けなければやっていけないこともあるので、とても難しいです。

【あべのコメント：大学生のときに、山里に住んでいるゼミの先生がニワトリやシチメンチョウをつぶす催しがあるからといってさそってくれたことがありました。わたしは寝坊してしまったのでニワトリ1羽だけを処理しました。いい経験をしたと思います。最初に首を切って、血抜きをします。ニワトリの血はたいした量はでないのですが、シチメンチョウはどばっと血がでていました。お湯でかるくじゃばじゃばして、羽をぬきます。内臓をとりだして終了だったかと思います。目をそむけるようなことではないと思います。】

…私自身もそうだが、人種差別だけでなく、問題に対して「関わらない関わり方」という姿勢が良くないと自覚し、知らないからわからなと逃げているように思った。

「差別をしてはいけない。」といった言葉は浅はかで、誰もが言えるものであることに気づかされた。私を含め、本当の差別については知らない人が多くいるのではないかと考えた。それは革製品の作業過程の差別のように、タブー視され、多くの人に状況を伝える通路がないからだと思った。差別は、“相手を自分とは違う！と見る”だけでなく、“相手の存在を見ようとしない”ことから生まれることに気づかされた。また、人種差別・障害者差別のように、差別といったものは個人を見ること無く、人種、障害者という概念でしかとらえていないことが最大の問題であると思った。その概念で見ることは、自分たちの一方的な認識でしかなく、事実と違うことはあると思うし、そういったところから偏見が生まれてくると考えた。

【あべのコメント：そうですね。だれかを記号化してしまうことが問題なのだと思います。】

自分がテスト問題として提案するのは日本と海外で同一の事件をどのような報道しているかをしらべることです。これを行うことによって一つの事を多角的にとらえる視点を発達させ、より物事を本質的にとらえることができると思います。

【あべのコメント：とてもいい問題ですね。今回の採用はむずかしいですが、来年以降にやってみたいです。】

エルジェの『タンタンのコンゴ探検』において、コンゴの人々が差別的に描かれていたりタンタンやその犬の発言が差別的であることが“人種差別だ”と批判されていることは有名ですが、日本とその他の国でタンタンの公式サイトの内容が全く同じものではないことも問題だと思いました。というのは、フランス語版や英語版の公式サイトには、この『タンタンのコンゴ探検』の概要において植民地主義やパターンリズムのことなど歴史的背景について書かれていますが、日本語の公式サイトにはそういったことは一切書かれていませんでした。子ども向けの本だからなのでしょう。他の言語のサイトには書かれているのに日本語版だけ、どうして無いのか不思議でした。…後略…

…講義などでLBGTに関することだけ勉強するものなんだか違和感があります。「違いを受け入れよう！」と言うわりには、LBGTの方を特別扱いして、腫れ物に触れるように接している気がして…。差別するのはもちろんダメだけど、当事者の方からしたら、勝手に話題にあげられて、“受け入れる努力の強制”を異性愛者がしているのは、「ほっとけよ！」ってなるんじゃないかなと思います。わざわざLBGTであることを意識するんじゃなくて、なんかもっと、自然な感じでみんなが暮らせたらいいのになと思います。（うまく言えないけど。）

【あべのコメント：よくわかりますよ。全体、社会の構造を見るのではなく、自分たちを空気のように当然なものとして位置づけたまま、そして自分たちを「受け入れる側」に位置づけたまま、「マイノリティに注目する」というありかたの問題。第2回でのべたように、この授業ではむしろ多数派のありかたに注目しようとしています。成功しているかどうかは学生のみなさんが判断、評価してください。】

同性愛者であることを公表することを“カミングアウト”と呼ぶのも、同性愛者の社会的地位の低さを表していると思います。私は自分の研究のためにフェミニズムやセクシャルマイノリティについての本や論文を読みます。それだけでも周りの友達から、授業で“フェミニズム”“LGBT”などのワードが出ると、私の方を見てクスクスと笑います。彼・彼女らにとってはたいした事でない（ただ珍しいのか？）と思いますが、私はとても不快に思います。…後略…

【あべのコメント：メディアが「告白」などという表現をしている場合もありますね。「公表」のように、価値判断をふくまない表現をえらぶべきです。有標化されるのが不快なのは、有標化する側は、あくまで自分たちを「ふつつ」に位置づけた状態（無徴）から他者化しようとしてくるからですね。】

…他の授業で、ホームレスを集団で襲い、殺害してしまう事件が多く起こった地域で、小学生が「子ども夜回り」としてホームレスの方と話をしにいく映像を見ました。子どもたちが話をしていたホームレスの方たちはすごく優しく話しやすいようで、病気やリストラなど、同じホームレスでも家を失う理由にも様々なものがあるのだと知りました。「雨の日には傘でつきさされることにおびえながら一晩を過ごしている」と言っているホームレスの方もいました。ホームレスの存在を一括りにして見下し、理由もなく攻撃するのは、まさに差別的行為だと思います。幼い頃から、ホームレスは「近づいてはいけない人、目を向けてはいけない人」として教えられてきたために、ホームレスに対して暴力や殺人があっても、あまり注目されないように感じます。ドラマや小説の中でも、ホームレスを替え玉として殺したりする描写を見ることがあります。家がないというだけで、同じ人間とは思えない扱いを受けてしまうホームレスについてもっと注目されるべきなのではないかと思います。

…私がちょうどニュージーランドに滞在していたときにクライストチャーチの事件がおきた。「犯人について語るのはやめて…」という話がニュースに何度も流れていた。良い考えだと思う。“They are us”のスローガンも印象に残っている。

差別はもちろん良いことではない。私が思うのは、「差別をなくす」とはどういうことなのだろうか。平等に扱えば、それで良いのか。例えば、生まれつき足が悪い人がいたとしても、健常者と平等に扱うという点で、階段のみでスロープをあえてつけないということはない。しかし、スロープをつけると、これは彼らに対して特別な処置をしているということだ。これは平等なのだろうか。特別扱いすること自体が、その人を差別対象として見ているとしか思えない。…後略…

【あべのコメント：国連の障害者権利条約で規定されている「Reasonable Accomodation」（正当な調整）、日本で2016年にできた障害者差別解消法で規定されている「合理的配慮」という概念は、その人が参加するために必要な措置をするのが当然だという理念にもとづいています。だれもが参加できる、利用できるのが当然で、その状態になっていない場合、調整しないといけない。「特別扱い」というのは、そもそもバリアをつくってしまっている時点で発生しているのです（健常者だけを優遇）。健常者だけを優遇するのをやめるということです。それが平等で公正なこと。要するに、「特別扱い」という発想が古いということ。食文化の回で説明したとおりです。】

私は野球が好きで、よく観るのですが、日本のプロ野球における外国人の扱いについて疑問を抱くことがあります。まず、マスコミなどのメディアは外国人選手のことを「助っ人」と呼びます。これはどうなのでしょう。明らかに日本人選手と切り離して考えているように思えます。また、日本のプロ野球には「外国人枠」というものがあって、一軍に登録できる外国人選手が4人までと決められています。なので、その4人から漏れた選手はいくらいい選手でも一軍の試合には出られません。一方、MLBは外国人枠はなく、さまざまな国籍の選手が等しく活躍しています。…後略…

【あべのコメント：大谷選手が活躍するとよるこぶように、外国出身の人が日本で活躍することも歓迎すればいいのにと思いますね。ダブルスタンダード（二重基準）がある。相撲でも「日本出身力士」などと排他的な表現をしている。】

…『トムとジェリー』で登場するお手伝いさんも、ふくよかな体型の黒人のおばさんで、いつも顔から下しかうつされていません。これも一種の差別ではないのかと思います。…後略…

【あべのコメント：『トムとジェリー』についてはほかの学生もコメントで書いていました。「『トムとジェリー』の人種差別問題が（今ごろ）話題に」という記事が参考になりました (<http://themainstream.jugem.jp/?eid=2053>)。】

…私は書店とレンタルショップが一緒になったお店でアルバイトをしています。少女マンガコーナーで棚の整理をいたとき、男性のお客様がコーナーに来て、本を手にとって見ていました。すると、別の女性客2人組の方たちが「あの人ってさあ…」と明らかにその男性客を見て話していました。…後略…

【あべのコメント：いい作品が「少女マンガ」にあるから性別をとわず読者がいる、それだけのことですね。男性が読んでいることを奇異に思うのは、逆に少女マンガをバカにしているのではないかと感じます。】

———

7月26日のテストについて (2)

- ・ひきつづきテスト問題を募集します。
- ・正解主義的なテスト問題の提案がよくありますが、そういうものは基本的な知識を問う問題にしてください。議論の余地があるものについて「正解」を問うようなテスト問題はふさわしくありません。
- ・テストでは、自分で用意したA4の紙1枚まで持ち込み可とします。配布プリントはダメ。電子機器も使用不可です。
- ・事前公開した問題については、答案をパソコンで作成し、A4の紙にプリントアウトして持参してもいいです。(その場合、当日手書きしなくていい。かならず名前などを書くこと。裏表1枚におさめること)
- ・回答は、自分独自のものにしてください。ウェブからの引用はダメ(新聞記事についての問題は、記事から引用可)。ほかの学生とおなじ内容を書いてもダメ。
- ・漢字をわすれたときなど、ひらがなで書いても減点しません。
- ・テストまでに、これまでの配布プリントを読みかえしてください。